バカとテストと色付き眼鏡(サングラス)

松竹梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと色付き眼鏡（サングラス）

【Ｎコード】

Ｎ８３０４Ｘ

【作者名】

松竹梅

【あらすじ】

文月学園に通うサングラスをかけた主人公、鈴風松也（すずかぜしょうや）。観察処分者の吉井明久とは幼稚園からの姫路瑞希とは小学校からの幼なじみであり、姫路瑞希とは一年生の春休みから恋人同士となった。これはそんな彼と仲間達の青春学園コメディーである。

タイトルを変更しました

第一話（前書き）

はじめまして、作者の松竹梅です。

小説を書くのははじめてですが、暖かく見守って下さい。

第一話

校舎へと続く坂道。
桜の花が咲き乱れた並木道を
俺は全力で走っていた。
しかも人一人背負って、

「ハッ！ハッ！、たくっ！寝坊するなよ瑞希！」
「す、すみません！今日から新学期だと思うと緊張してしまって…」
「とにかく急ぐからな！」
オレ、鈴風松也は幼なじみ兼恋人である、姫路瑞希を背負い坂道を走っていた。
何故背負っているかって？

彼女は体力がないからだ。

「遅刻だぞ！鈴風！姫路！」

学校に着くと校門のところにひとりの教師がいた。

「おはようございます！西村先生、遅刻してすみません！」

「おはようございます！西村鉄人先生、今日も暑苦しいですね？」

「鈴風？今、名前を鉄人と呼ばなかったか？それに暑苦しいは余計だ！」

「気のせいですよ」

「……まあいい。ほら。」

鉄人は二通の封筒をそれぞれに渡した。

「二人とも惜しかったな…。俺が試験官ならなんとかしたんだが」

「き、気にしないで下さい。あれは私の不注意で…」

「そうだぜ、てっちゃんが落ち込むことないって」

「誰がてっちゃんだ！

まあいい、よし、急げ！ＨＲは始まっているぞ！」

「はいよ！いくぞ瑞希！」

「は、はい失礼します！」

こうして二人は急いで教室に向かった。

「今更だがなんでアイツは姫路を背負ったままだったんだ？」

二人は玄関に着いてからそのことに気づき、姫路は顔を真っ赤にしていたが、松也は気にすることなく姫路を連れて教室へと向かった。

第一話（後書き）

初めっから、やっちゃいました。

勢いで書きましたが、このあとどうしよう…

感想待ってます！

第二話（前書き）

更新が遅れてしまった…

たぶん、不定期更新になるのでよろしく

第二話

オレと瑞希は教室の前まで来たのだが、

「おい、瑞希。本当にここか？」

目の前には、廃屋と言っても差し支えないモノがあった

「と、とにかく入ってみませんか？」

姫路の反応がぎこちないが入ることにした

「「すみません。遅れました」」

『『『『『…え？』』』』』

クラスの奴らは俺と瑞希が入ってきて驚いていた。

いや、『オレと瑞希』にではなく、『瑞希』にだろう。

なんせ、瑞希は学年二位の才女なのだ。

「丁度良かったです。今、自己紹介をしているところなので姫路さんと鈴風くんお願いします」

「はい、姫路瑞希です。よろしくお願いします」

『はい、質問です』

「は、はい、なんでしょうか？」

『なんでここにいるんですか？』

聞きようによってはかなり失礼な質問だが

まあ、しょうがないだろう

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

『『『あぁ～』』』

なんか全員（一部をのぞいて）納得していた

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？　あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて』

『黙れ1人っ子』

『前の番、彼女が寝かせてくれなくて』

『『『異端者だ！』』』

『すみません！調子こきました！』

……予想以上のバカ共だ…

「次に鈴風くんお願いします」

福原先生がオレに呼び掛けた

（次はオレか、ここは一発やっとくか）

「え〜、鈴風松也です。一つ言っときますが姫路瑞希はオレの彼女で…

『『『異端者だ！』』』

カチャ（サングラスをはずす音）

ギロッ！！（男子生徒を睨む）

…もし手を出したら命の保障はありません。

…分かりましたか？」

『『『イ、イエス　サー！』』』

カチャ（サングラスをかける音）

（これでいいだろ）

「こ、これから一年よろしくお願いします」

「よろしく〜」

交際宣言を聞いて姫路は顔を赤くして後ろの席に向かい、松也もそのまま後ろに向かった

第二話（後書き）

主人公、一睨みでクラスメイトを黙らせるwwwwwww

いつまで効くのやら……

第三話

後ろの席に向かうと見知った顔があった

「よう明久、おはよう」

「おはよう、松也に瑞希ちゃん」

「明久くんおはようございます」

この男子生徒は吉井明久といい、オレと姫路の幼なじみであり

この学年きってのバカだ

……前までは

「二人とも残念だったね」

「お前こそ遅刻しなければ、もうちょっと上のクラス狙えただろうにな」

「あはは、いろいろあってね」

ちなみに、後から明久から聞いた話だと

道端にうずくまっていた女子を見つけ急いで病院まで運んでいき、

学校に向かったが遅刻してしまっただとか、

それを聞いた西村先生や学年主任の高橋先生などが再試験ができるよう掛け合っていたが、

教頭などが『これは校則である』ということで、結局再試験を受けれずにFクラスとなったわけだ。

「おいおい、明久がFクラス以外で行けるクラスなんてあるのか？」

明久と会話をしているとゴリラが話しかけてきた。

「誰がゴリラだ！」

「雄二、何叫んでるの？」

ゴリラもとい坂本雄二がいきなり叫んだことに明久は不思議そうな

顔をしていた

「なんだ雄二知らないのか？こいつ三学期になってから瑞希とオレで勉強を教えて、今はＤクラス上位くらいの成績はあるぞ？」

「全く、嘘はほどほどにしろよ」「いや、ほんとなんだけどな…」

「やっぱり信じてもらえないか…」

「あはは…」

松也が明久の成績が上がっていることを告げても雄二は信じてなく、明久は溜息をはき、姫路は苦笑いをしていた。

パンパン！

「はいはい。そこの人たち、静かにしてください」

「あ、すみま

バキィッ！　パラパラパラ……

せん？」

「え～。代えを持ってきますので、少し待っていてください」

気まずそうに先生は教室から出ていった。

…

……

……よし

「おい、ゆ『雄二、ちょっといい？』……」

松也が雄二を呼ぼおとしたところ、明久に先に言われてしまった

「なんだ明久？」

「ちょっと話があってね。廊下の方で話そう。松也も来てくれる？」

「あぁ、いいぞ」

明久達は廊下の方で話をすることにした

「……私はどうしたらいいんでしょう？」

おいて行かれた姫路は、一人寂しく待つこととなった

第三話（後書き）

明久の成績が上がっているｗｗｗ

成績は上がったが大丈夫だろうか？

第四話（前書き）

連続投稿です！

それではどうぞ。

第四話

「それで話ってなんだ？」

「この教室のことだけど」

「Fクラスか？想像以上に酷い所だな」

「Aクラスは見た？」

「まだだが…」

「あぁ凄かったな。あんな教室は見たことないな」

オレが見ていないないと言うと雄二が見たときの凄さを言った。

「そんなにか？」

「個人でエヤコンや冷蔵庫が使えて、座席はリクライニングシートだぞ？」

「……」

あまりの凄さに何も言えなくなった

「そこで僕からの提案、『試召戦争』をやってみない？」

「「戦争だと？」」

「うん！しかもAクラス相手に」

「・・・何が目的だ？」

「いや、え～と、

「嘘を言うな」

「正直に話せ」

あまりに酷い設備だからって、なんで、先にそんなこと言うの！」

「勉強に興味がないお前に設備なんて関係ないだろ」

「それにお前は『試験校だからこその学費の安さ』に惹かれたんじゃなかったか？」

「あーえーっとそれはその・・・」

雄二とオレが追求すると明久は戸惑い始めた

「瑞希のためなんだろ？」

「う、うん、そうなんだ」

「まぁ、オレも雄二に頼もうとしていたしな」

「気にするな。俺もAクラス相手に試召戦争をやろうと思っていたところだ」

「え？雄二も？」

「何でお前が試召戦争をやろうと思ったんだ？」

「世の中、学力が全てじゃないって証明をしてみたくてな。それにAクラスのための秘策も思いついた」

そういうと雄二は教室に入って行ったので松也と明久も教室に入った。

「坂本君、キミが自己紹介の最後の一人です」

「了解」

雄二君は先生に呼ばれて席を立ち、ゆっくりと教壇に向かっていった

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも、好きなように呼んでくれ」

「じゃあ、ゴリラ」

「誰がゴリラだ！」

「じゃあ、ビックフット」

「誰がUMAだ！」

「「じゃあ…」」

「待て！これ以上何を言うきだ！」なかなかいいツッコミだ！

「……さて、皆に一つ聞きたい

不満はないか？」

『『『『『大ありじゃあっ！！！！！』』』』』

魂の叫びだった

「だろう？　俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問題意識を抱いている」

雄二が同意すると、あちこちから不満の声があがり始めた

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！　改善を要求する！』

『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！　あまりにも差が大きすぎる！』

『そうだそうだ！』

『理不尽だ！』

「みんなの意見はもっともだ。そこで、これは代表としての提案なんだが」

自信たっぷりの野生味溢れる笑顔で言った。

「Ｆクラスは、Ａクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

第四話（後書き）

ついに、遂に、戦争をしかけます！

楽しみにしてください

第五話

雄二の、いきなりの提案。

それに対し、クラスメイト達は非難し始めた

『勝てるわけがない！』

『これ以上設備が落とされてたまるか！』

『姫路さんが居たら何もいらない！』

（誰だ瑞希にラブコールを送ったのは？……ぶっ飛ばしてやる……

いや、それ以上の……）

松也が黒いオーラを出し始める

「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

『無理に決まってるじゃん』

『そう言われても何の根拠もないしな』

「根拠ならあるさ。

このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

雄二は自信ありげにそう宣言した

「それを今から証明してやる！

おい康太、いつまで姫路のスカートを覗いてないでこっちに来い」

「・・・・・・！！」

そういうと康太と呼ばれた青年は素早く立ち上がり首を横に振った

「はわぁ！？」

姫路は見られていた事に顔を朱くし、スカートを押さえた

「土屋康太　こいつがあの有名な寡黙なる性職者（ムッリーニ）だ」

そういうと康太（ムッリーニ）は首を横に振った

『馬鹿な……奴がそうだというのか？』

『だが見ろ！まだ証拠を隠そうとしているぞ……』

『あぁ、ムッツリの名に恥じない姿だ』

ムッツリーニとは、男子から畏怖と畏敬を女子からは軽蔑をもって言われている名だ

（瑞希のスカートを覗くとはな……後でＯ★ＳＨＩ★Ｏ★ＫＩが必要だな）

「それに姫路の事は皆その実力をよく知っているはずだ」

「え？私ですか？」

「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

『そうだ！俺達には姫路さんがいる！』

『彼女ならＡクラスにも引けをとらない！』

『姫路さんさえいれば何もいらな（ドンッ！）ゲホォ！？』

いい加減腹が立ってきたので、殴り飛ばしといた

「それに木下秀吉だっている」

「ワシもか？」

『演劇部のホープだったか？』

『確かＡクラスに木下優子っていう姉がいたな』

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本って小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ』

『確かになんかやれそうな気がしてきたぞ』

『これいけるんじゃないか！？』

教室のやる気が高まっていき

「それに吉井明久だっている」

一気に静まりかえった。

『誰だ吉井明久って』

『そんな奴このクラスにいたか？』

「おい雄二！何でそこで僕の名前をだしの！？せっかく上がった士気が台無しじゃない！だいたい僕は普通の人なんだから普通の扱いをしてよ！」

明久が文句を言うと、雄二が睨み付けてきた。

「そうか、知らないのなら教えてやる。

こいつの肩書きは『観察処分者』だ！！」

『それって、バカの代名詞じゃなかったか？』

『確か真のバカに与えられる称号だったハズだな』

「みんなひどいよ！」

明久はクラスメイトからの言葉に泣いていた

「あの～、観察処分者って何ですか？」

「瑞希、それは後で教えてやるよ。雄二、続けてくれ」

「あぁ、とにかくだ！俺達の力の証明するためにまずＤクラスを制圧しようと思う。　皆この境遇に大いに不満だろう？」

『『『『『当然だ！！』』』』』

「なら全員筆（ペン）を執れ！！出陣の準備だ！」

『『『『『おぉーーーーーッ！！』』』』』

雄二「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Ａクラスのシステムデスクだ！！」

『『『『『うおぉーーーーーッ！！』』』』』

「おッおー／／／」

姫路は恥ずかしそうに腕を振り上げていた。

可愛いな～～

かくして、試召戦争の幕があがった

第五話（後書き）

いよいよ試召戦争がはじまります！

戦闘シーン、上手く書けるかどうか……

余話～キャラ紹介～（前書き）

遅くなりましたが主人公の紹介です

新しいことが判り次第、随時更新します

１１月１０日　更新

余話～キャラ紹介～

名前：鈴風　松也

読み：すずかぜ　しょうや

容姿：身長は雄二より少し低めで、黒髪にツンツンした感じの髪型、（禁書の土御門を黒髪にした感じ）瞳は金色。

クラス：F

趣味：サングラス集め・料理・ゲームや漫画

好きなもの（こと）：瑞希・母親・弟妹・明久・努力する人間

嫌いなもの（こと）：瑞希、母親、弟妹、明久を傷つける人間・努力する人間をバカにする人間

備考：いつもサングラスを掛けているが、外すとヤクザ顔負けの目つきをしている。

なので中学時代は、不良に絡まれ、子供には泣かれと散々なこととなり、明久の勧めでサングラスを掛けるようになった。家族構成：母親・自分・弟・妹の構成

成績：Bクラス上位くらいだが、振り分け試験の時に体調を崩した姫路を保健室に連れて行くため無得点扱いとなる

召喚獣：見た目は松也をデフォした形で破戒僧の姿。武器は錫杖で

ある

腕輪：後のお楽しみ！

余話～キャラ紹介～（後書き）

設定を考えるのも骨が折れるな…

第六話（前書き）

都合により、Ｄクラス戦の件は省略します

では、どうぞ。

第六話

「明久、宣戦布告してきたんだな」

あの後、明久が宣戦布告の使者となり、心配になったため一緒ついて行くことにした

案の定、下位勢力の使者に暴力を振るうという噂は本当で襲いかかってきたが、

サングラスを外し睨みつけると、大半の生徒が怯んだので、その隙に逃げてきた

「一応、今日の午後に開戦予定と告げてきたきたけど」

「じゃあ先にお昼ご飯だな？ほら明久、今日のだ」

「ありがとう！松也」

「？吉井のお弁当って鈴風が作ってるのね？」

島田は驚いたように松也に尋ねた。

「いや、これはお袋が作ったもんだが？」
「菊さんの料理はいつもおいしいね！」
「ふ～ん、そうなの」
「あぁ大体、去年の明久の食事は随分と酷かったからな～」
島田が適当に相づちを打った後、去年の明久の食事環境は酷かったといった
「いや……一応食べてたよ」
「あれは食べてると言えるのかの？」
「……お前の主食って水と塩だったろう？」
「失礼な！！きちんと砂糖も食べてたよ！」
「それは食べるとは言わんぞ明久」
「……正確には舐めるが正解」
「まぁ、飯代を遊びに使い込んだお前が悪かったからな……」
「しッ仕送りが少なかったんだ！」

「趣味にお金かけ過ぎるからだ……」

「ところで雄二よ。１つ気になったんじゃが、どうしてＡでもＥでもなくＤクラスなんじゃ？」弁当を食べて一休みした後に秀吉が今後の試召戦争のことについて聞いてきた

「色々理由はあるんだがＥクラスは相手じゃないからだ。姫路に問題のない今、正面からやりあってもＥクラスには勝てる。Ａクラスが目標である以上、Ｅクラスなんかと戦っても意味がないってことだ」

「？それならＤクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のＡクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？
それに、さっき言った打倒Ａクラスの作戦における必要な布石だしな」

「あ、あの～」

「ん？　どうした姫路」

「えっと、その。さっき言いかけたって

……松也くんと明久くんと坂本くんは、

前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。　それはついさっき、姫路の為にって松也と明久に相談されて――」

「それはそうと！」

明久タイミングが悪いぞ。別にバレてもいいんじゃないか？

「さっきの話、Ｄクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

明久を笑い飛ばす雄二

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる

・・・・・・いいか、お前ら。

ウチのクラスは――最強だ」

「良いわね。　面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Ａクラスの連中を引きずり降ろしてやろうかの」

「……（グッ）」

「が、頑張りますっ。し、松也くんもがんばりましょう！」

「あぁ！当然だ！」

「頑張ろうね！松也に瑞希ちゃん」

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

そして、俺達は勝利のため雄二の作戦に耳を傾けた

第六話（後書き）

姫路の弁当の話がない！？

一体、どうなっていくんだか……

第七話

「先生！採点お願いします！」

「こっちもお願いします！」

「僕もお願いします！」

昼休みも過ぎて、いよいよDクラス戦が始まったが、松也と姫路と明久は振り分け試験を受けていないため無得点扱いとなっている

「松也と瑞希ちゃんは相変わらず速いよね」

「明久もずいぶん速くなったじゃないか？」

「そう？なら、うれしいなぁ」

明久は松也と姫路の解答の速さを見て賞賛していたが、明久も去年よりも解答する速さが上がっているというと明久は嬉しがっていた

「ですけど、本当にDクラスに勝てるんですか？」

「あの雄二が勝算もなしに戦争を仕掛けないだろう？」

「で、ですけど……」「まぁ、オレ達はあいつを信じて先ずはテス

トを終わらせとこうぜ」

「うん、そうだね」

Dクラスに勝てるか不安になっていた姫路を松也が落ち着かせ、テストは続いていった

ピンポンパンポーン！

しばらくテストをしていると放送を告げるチャイムが鳴った

《船越先生、船越先生》

「この声は須川くん？」

「雄二の作戦じゃないのか？」

オレと明久が不思議に思う間も放送が続いていく

《吉井明久が体育館裏で待っています》

「え？」

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「須川あああぁあああぁ！！」

「吉井君、テスト中なので静かにして下さい」

明久の怒りの叫びが響いた

無理もない、船越女史は婚期を逃して焦りに焦った挙げ句、単位を盾に生徒に交際を迫るというこの学園で一、二を争う危険な先生なのだ

『おい、聞いたか今の放送！』

『ああ。Fクラスの連中本気で勝ちに来てるぞ！』

『あんなに確固たる意志を持っている奴らに勝てるのか……？』

遠くの方からDクラスの奴らが動揺する声が聞こえてきた

『皆、吉井の死を無駄にするな！』

『絶対に勝つぞー！』

『吉井、骨は拾ってやるからな！』

Fクラスの奴らの士気がうなぎ上りのようだ

その前にまだ、明久は死んでないんだがな

テストも受け終わり、

オレ達は雄二の所に来ていた

「シャァァアッ！」

雄二を目に捉えると同時に明久は襲いかかっていった

「お、船越先生」

……凄いな。

雄二が言った瞬間に明久が掃除用具のロッカーに入って行った

「さて、バカは放っておいて、そろそろ決着をつけにいくぞ！」

『おォ～～～～～！！』

いよいよDクラス戦も終わりに近づいてきた

ちなみに、ロッカーで怯えている明久をなんとか落ち着かせ、松也、姫路と共に戦場へと向かった

第七話（後書き）

なかなか物語が進みません…

第八話（前書き）

黒炉様

感想ありがとうございます

第八話

「下校している連中に上手く溶け込め！　取り囲んで多対１の状況を作るんだ！」

雄二の声が響く、どうやらゲリラ戦に持ち込むようだ

『そっちから、周り込め！　俺はこいつに数学勝負を申し込む！』

『なら、俺は古典勝負を！』

『よし、日本史で！』

Ｄクラスの連中を取り囲み、Ｆクラスのメンバーが次々に倒していく

『Ｄクラス塚本を討ち取ったぞ！』

一際大きな声が響き、ますます士気があがっていく

『援護に来た！みんな、もう大丈夫だ！　落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！』

よく響く声が聞こえた

Dクラス代表の平賀である

『Dクラス本隊だ、ついに動きだしたぞ！』

いよいよ初の戦闘の始まりだ

「準備はいいな、明久？」

「もちろんだよ！」

そう言うと明久とオレは戦場へと飛び出した。

「Fクラス撤退だ！分散して敵を攪乱しつつ後退するんだ！」

『逃がすな！　個人戦ならそうは負けない！　追いつめるんだ！』

雄二の退却命令にFクラス一同は下がり始めた

『本隊の半分はFクラス代表の坂本を追え！　残りは包囲されている者を救出だ！』

平賀の号令の下、あっというまに雄二を中心としたFクラス本隊はDクラスメンバーに囲まれてしまった

だがそのためにDクラス本隊に隙が出来てしまった

「いくぞ明久！」

「わかったよ松也！」

「「Fクラス　鈴風松也・吉井明久が近衛隊の六人に日本史で勝負を申し込む！」」

『え！？』

「「試獣召喚（サモン）！」」

『し、試獣召喚（サモン）！！』

明久の召喚獣は改造学ランに木刀という不良のような姿を

松也は、法衣を着て数珠を首からさげた姿は僧侶の様に見えるが

ボサボサな髪とサングラスが相まって、まるで破戒僧のような姿の召喚獣だ

そのすぐ後に点数が表示された

《Ｆクラス　鈴風松也　吉井明久　日本史　３１６点　１５９点
ＶＳ
Ｄクラス　近衛隊Ｘ６　平均９４点》

『なんだあの点数！？』

『本当にＦクラスか！？』

「よそ見してる暇は…」

「「ない！！」」

Ｄクラス生徒が驚いている隙に松也達は襲いかかった

『ちくしょー！なんであたんねんだ！？』

『とにかく代表はいったん下がってて！』

なかなか攻撃が当たらないことに焦りを感じたのか徐々に後退し始めた

だが、前に集中するあまりに後ろから来る少女に気づいていないようだ

『あ、あの…』

少し離れたところで、平賀の後ろから、申し訳無さそうに姫路が声をかけていた

『え？姫路さん。どうしたんですか？Aクラスはこの廊下を通らないし、今は戦争中なんで…』

『は、はい、それでですね…』

未だに現状を把握出来てない平賀と、もじもじと言いづらそうに姫路はいった

『え、Fクラスの姫路瑞希です。えっと、宜しくお願いします』

『あ、こちらこそ』

（おい、敵に挨拶してどうするんだ瑞希！？）

『その……Dクラス代表の平賀君に現代国語勝負を申し込みます』

『はぁ…、どうも』

『あの、えっと……さ、試獣召喚です！』

『え？あ、あれ？』

平賀は今更気付いたようだがもう遅い

《現代国語　Ｆクラス　姫路瑞希　３４９点
ＶＳ
Ｄクラス　平賀源二　１２９点》

『ご、ごめんなさいっ』

姫路は大剣を軽々と振り回し、平賀の召喚獣をあっさり斬り捨ててしまった

こうしてＦクラス対Ｄクラスの試召戦争は終了した

第八話（後書き）

甘甘なシーンなんて書けるんだろうか……？

アドバイスなどあったら教えて下さい

第九話（前書き）

前書きはなにをかいたらいいんだろうか？

第九話

Ｆクラス勝利という知らせにＦクラス生徒は歓声をＤクラス生徒は悲鳴をあげていた

「ま、まさか姫路さんがＦクラスだなんて……信じられん」

平賀は信じらんないという顔で膝をついていた

そんな平賀をクラスメイト達は慰めていた

「あ、その、さっきはすみません……」

違う方向から瑞希ちゃんも駆け寄って謝る

「いや、謝ることはない。全てＦクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。まぁ、吉井君の成績が上がっていたのは驚いたが…

ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか坂本？」

「いや、その必要はない」

平賀は今後の設備移動について聞いたが、雄二は断った

「え？なぜだ？」

「Dクラスの設備を奪う気はない、俺達の目標はあくまでもAクラスだ」

打倒Aクラス。これがオレ達の目指すものだ

「それは有り難いが……。それでいいのか？」

「勿論、条件がある」

「……一応聞かせて貰おうか」

「何、そんなに大した事じゃない。俺が指示をだしたら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

雄二が指したのはDクラスの窓の外にある室外機。但し、それはDクラスの物ではなく、Bクラスのものだ

「Bクラスの室外機か？」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性はあるだろうが、そう悪い取引じゃないだろう？」

「それは此方としては願ってもない提案だが、何故そんな事を？」
「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」
「……そうか。では此方は有り難くその提案を呑ませて貰おう」
「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう帰って良いぞ」
「ああ。有り難う。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」
「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っているだろ？」
「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるかどうか…まぁ、応援するよ」
じゃあ、と手を挙げてDクラス代表、平賀源二は去っていった

「それじゃあ僕たちも帰ろうか」
「そうですね」
戦後対談も終わり、松也達は帰りの準備をしていた

「悪い、この後用事があるから先に行っててくれ」

「用事？なにかあったの？」

明久はどうやら忘れているようだ

「船越先生を説得しに行くんだよ」

「！？……（ガタガタッブルブルッ）」

「あ、明久くんしっかりして下さい！大丈夫ですから。ね？」

思い出したようで顔を青ざめ、体を震わせる明久。それを姫路が落ち着かせていた

「あとのことは俺に任せてくれ。瑞希のこと頼んだぞ？」

「……うん、そうするよ。

……松也、無事に帰ってきてね」

「あぁ、だって俺…

帰ったらお袋の手料理を食べるんだから！！」

「やめて！そんなフラグたてないで！って行っちゃった……」

果たして松也の運命は！

第九話（後書き）

まさかの死亡フラグ！

はたしてどうなるんだ！

第十話（前書き）

更新が遅れました

どうぞ

第十話

～明久　ｓｉｄｅ～

「おはよう瑞希ちゃん」

次の日、学校に向かってると瑞希ちゃんが先を歩いてたんで声をかけた

「あ、明久くん、おはようございます…」

？なんか落ち込んでるみたいだな

ん？そういえば、松也が見当たらない…

ま、

まさか……

「松也に何かあったの！？」

「はい実は今朝、松也くんのお家に行ったのですが……

お、お義母さん／／／の話では昨日、ボロボロになって帰ってきたからもう少し寝かせておくと言ってました／／／」

松也……

無事に帰ってこれたんだね……

ちなみに松也の母親と瑞希ちゃんの両親は二人の交際を認めており、家族公認というわけだ

「それじゃあ、松也は後から来るんだね？なら、僕たちは先に行こうか」

「はい、そうですね。」

こうして僕たちは学校に向かった

～side　out～

「……（チーン）」

今は回復試験が一段落ついて昼休みである

松也は昨日の疲れもあってか、机の上に倒れていた

「松也、昼休みだよ」

「……そうだな……」

「よし、昼飯でも食いに行くぞ！　今日はラーメンとカツ丼とカレーと炒飯にすっかな？」

「どんだけ食う気だよ……まぁ、オレも弁当忘れたし一緒に行くか」

「それじゃあ僕も」

雄二が学食に行こうとするといつものメンバーも一緒に行くことに

「あ、あの」

ゾワッ！！

その瞬間、明久と松也は背中に妙な寒気を感じた

「なんじゃ、姫路よ？」

「え、えっと。お昼なんですけど、私のを食べませんか……」
「もしかして弁当か？」
「はッはい、迷惑じゃなかったらどうぞ！」
「迷惑なもんか！なぁ、明久に松也…って何震えてるんだ？」
「な、なんででもないよね！松也！」
「あ、ああ、そうだよなな！明久！」
「おぬしらのその姿を見ても全く説得力がないのじゃが…」
明久と松也は顔を青ざめ、体を震わせており、見てる方は不思議がっていた
「せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上にでも行くかのう」
「だ、だったらお前ら先に行っててくれ」
「ん？松也はどっか行くのか？」
「の、飲み物でも買ってくる。ぜ、全員お茶で良いよな？」
「ああ、良いぞ」

「なら僕も行くよ！！ひ、１人じゃ持ちきれないでしょ？」

「きちんとお前たちの分はとっておくよ」

「「お、おかまいなく！！」」

こうして明久と松也はお茶を買いに、姫路達は屋上へと向かった

「瑞希ちゃんのお弁当、美味しくなったのにね……」

「ああ、そうだな。美味しくはなったが、まだまだ慣れんな……」

「そうだね……」

実は中学時代に姫路の弁当を松也が食べたのだが、食べた瞬間に意識を失った

次に目を覚ましたのは、その日から三日後のことだった

姫路の料理が原因だと聞いた松也の母親が、試しに料理の”さしすせそ”を聞いたところ

答えはすべて薬品の名前だった

それで早速、姫路の料理を直そうと明久も加えて料理教室を開いたが
結果は惨憺たるものだった
松也の母親は某プロボクサーの様な格好で燃え尽きており、明久と
松也はそれから一週間寝込んでしまった
だが、苦労の末になんとか直すことはできた
ある『欠点』を残しては……

屋上に着くとみんな楽しそうに姫路の料理を食べていた

「おう、お前ら遅かったな」
「あんた達のはちゃんとあるからね」
「「ありがとう…」」
「皆さん、デザートもあるんですよ♪」
「デザートもか！」

「それはありがたいのじゃ」

「……ごちそうになる」

姫路はカバンからゼリーの入ったカップを取り出し、四人に渡した

だが、ここで明久と松也は驚いたような顔をした

「瑞希……これは前に作ったことあるか？」

「いいえ、初めてです」

初めてです

……はじめてです

……ハジメテデス

「全員、今持っているモノを下に置くんだ！！」

「は、早くみんな下に置いて！でないと大変なことに！？」

姫路の言葉を聞いた途端、二人は大声を出した

「何そんなに慌ててるんだ？」

「……まさか、独り占めにする気か」

「そうはいかないわよ」

「そんなにうまいのかの？」

みんなは止めているのはゼリーを独り占めにしたいのだと勘違いしているようだ

「じゃあ、お先に（パクッ）」

「……（パクッ）」

「あぁ！ゆ、雄二！」

「ムッツリーニ！」

「だから、何よさっきから慌て

バタン×2

ガタガタッ×2

て…って、え？」

倒れた音のした方を見ると体を小刻みに震わせて口から泡を吐いている

雄二とムッツリーニの姿があった

「ゆ、雄二！しっかりして！」

「ムッツリーニ！大丈夫か！とにかく島田！下の購買に行ってあるだけお茶を買ってこい！」

「わ、分かったわ！」

この光景に秀吉はカップを置き震えだし、姫路は何が起こったか分からないようだ

しばらくの間、屋上は騒がしかった

～余談～

「そういえばさ」

「なんだ？」

お茶も買い、屋上に向かっていると明久が松也に話しかけていた

「昨日、船越先生になんて言って諦めさせたの？」

「あぁ、そのことか…」

松也が遠い目をした

「最初に体育館裏に行った時『別の名前を出したのは恥ずかしかったからね！』なんて言って襲いかかれてな……

そのままリアル鬼ごっこをしたんだが、何とか落ち着かせて、今度いい生徒を紹介するってことで退いてくれたよ……」

「松也……ありがとう！」

明久は英雄に向かって心から礼を言った

第十話（後書き）

姫路の料理はやはり！！

はたして、その真相は！！

第十一話（前書き）

遂に姫路の料理が明らかに！！

第十一話

「二人とも大丈夫か？」

「あぁ、なんとかな」

「……死ぬかと思った…」

あの後、必至の救急処置によりなんとか二人は助かった

「あれはいったい……」

島田は未だに何が起こったか分からないようだ

「瑞希ちゃんは最初、料理ができなかったんだ」

「なんだ不味かったのか？」

「黒こげの方がまだマシだ。瑞希は何故か薬品を入れてくる」

「や、薬品だと！？」

この発言に一同は再度、顔を青ざめた

「お袋と明久のおかげで食えるくらいにはなったんだが、
”あるところ”だけは未だに直らないんだよな」
「なんだ？あるところって？」
「瑞希ちゃんはね、何故か初めて料理するモノに限って薬品を使うんだ」
「あぁ、しかもある程度教えたモノじゃないとこれは続くしな……
ちなみに毎回、注意してはいるが、目を離すとすぐに入れようとするんだ」
「本当にすみません……」
「……」
「こ、怖いわね瑞希は…」
「……恐ろしい」
「次からは気を付けるようにするかの…」
みんな今後は用心深くなるだろう
「それよりさ。次の作戦を話そうよ」

「そうだな」

「ところで雄二よ、次はＢクラスなのかの？」

「ああそうだ」

「……目標はＡクラスでは？」

「正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃＡクラスには勝てやしない」

雄二らしくもない降伏宣言

まぁ、うちのクラスを見るとそうなるな

「それじゃあ、ウチらの最終目標はＢクラスに変えるって事？」

「いいや、そんな事はない。Ａクラスをやる」

「それってどういうことですか？」

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込もうと思う」

「一騎討ちに？どうやって？」

「Ｂクラスを使う。

下位クラスが負けたらどうなるか明久、知っているな？」

「え！？えーと・・・」

そこに姫路が明久にどうなるか説明していた

「つまりはBクラスならCクラスの設備になるわけだ」

「逆に上位クラスが負けたら設備が入れ替わるんだぞ？

覚えておけよ明久」

「うん、わかった」

「交渉内容については考えてある。俺に任せてくれ」

「じゃがな、それでも問題はあるじゃろう。そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？」

「そうだね。瑞希ちゃんがいることは既に知られているだろうし」

「それに関しても考えがある、心配するな。とにかくBクラスをやるぞ！細かいことはその後だ」

『了解』

「よし、明久」

「？」

「今日のテストが終わったらＢクラスに行って宣戦布告して来い。時間は明日の正午からだ」

「ヤダよ！雄二が行けばいいじゃないか？」

「いいから行ってこい。大丈夫だ……半分は」

「半分って何！？」

「明久、俺も行ってやるよ。確認しときたいことがあるからな…」

「確認？なんかあるのか？」

「な～に、ちょっと見かけただけだからな、確認が取れたら知らせるわ」

「あぁ、分かった」

こうして、昼休みは終わった

第十一話（後書き）

次回からいよいよＢクラス戦です

第十二話（前書き）

いよいよＢクラス戦開始！

第十二話

次の日の午後

「さて皆、総合科目テストご苦労だった。」

教壇に立ち、雄二が机に手を置いて皆の方を向いた

「午後からはBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、やる気は十分か？」

『おおーーーー！！』

「さて今回は姫路に前線に出てもら、

姫路、しっかり頼むぞ」

「が、頑張ります！」

『『『『『いよっしゃあぁーーーーー！！』』』』』

《キーン！コーン！カーン！コーン！》

そこでチャイムが鳴り響いた

「野郎共、きっちり死んで来い！」

『『『『おッーーーーーー！！！！』』』』

「行ってこい！！目指すはシステムデスクだ！！」

『『『『うおぉーーーーーーーーー！！！！』』』』

みんな教室から出て行った

「瑞希がんばって来いよ！」

「あれ？松也くんはどうするんですか？」

「俺は教室で待機だからな」

「そうなんですか……」

松也が前線に行かないと聞き、姫路は落ち込みだした

ポンッ

「？」

ナデナデ

「大丈夫だ、もし瑞希がピンチになったらすぐに行くからな

だから落ち込むなよ」

「！…はい！がんばってきます！」

松也に頭を撫でてもらったためか、満面の笑顔で姫路は戦線へと向かった

「さて、これからのことでも考えるか？雄二」

「そうだな…Ｂクラスの代表が、”あの”根本ならな」

根本恭二

悪い噂しか聞かない奴だ、今回は警戒してあえて教室に残る事にした

「……何も起きないよな？……」

『失礼するぞ』

しばらく経つと誰かが現れた

俺は後ろの方におり、雄二が話し始めた

『誰だ？』

『Ｂクラスの使者で来た』

『使者だと？』

『ウチの代表が一時停戦協定を結びたいそうだ』

『……停戦協定か……分かった、応じよう』

『分かった、俺たちは視聴覚室にいるからな』

『あぁ、後から行くと伝えとけ』

Ｂクラス生徒は戻っていった

「雄二、なんで停戦なんて結ぶんだ？」

「姫路の体力を考えると明日に持ち越した方が都合がいいからな」

「なるほどな」

「それでだ、お前は一緒に来るか？」

「いや、俺は一応教室に残る。行ってる間に教室で待ち伏せされるって可能性もあるからな」

「そうだな…それじゃあ行ってくるわ」

「あぁ、気を付けろよ」

「お前もな」

雄二は数人連れて視聴覚室に向かった

『本当に大丈夫なんだろうな？』

『根本のことだ。大丈夫だろ』

『そうだな』

雄二達が教室から出て、しばらくすると数名の生徒が入って来た

松也は見つからないように掃除用具のロッカーに隠れている

『さっさと済ませようぜ！』

バキッ！　　バンッ！

そして、その内の一人が一台のちゃぶ台を壊すと同時に松也がロッカーから出てきた

『『！！』』

「見たぞ、見たぞ～♪え～と、ひぃ…ふぅ…みぃ……全部で5人か」

『な、なんで人がいるんだよ！』

『知るか！それより先生に知らされたらやばいぞ！』

『そうだな……恨みはねぇが大人しくしてもらう！』

そう言って一人が殴りかかってきた

「はい正当防衛、成立…っと！」

『ガハッ！』

松也はカウンターで逆に殴り飛ばした

「どうした？この程度か？」

『この野郎！！』

『なめやがって！！』

二人ほど怒りを露わにさせながら、松也に殴りかかろうとしたとき

「貴様等そこで何をやっている！！」

『『げ、鉄人！？』』

「……ちょうどいい」

西村教諭が教室に入ってきた

「鈴風、これはどうゆうことだ？」

「どうゆうことって、そこにいる奴等がここの設備を壊すのを見つけたんですが、

いきなり襲いかかってきたんですよ？」

「ほ～、そうなのか貴様等？」

西村教諭は振り向き、Ｂクラス生徒に尋ねた

『い、言い掛かりです！』

『確かに俺たちはここに入ったがが、それは戦争しているからだ！』

『なのに、そいつがいきなり殴りかかってきたんです！』

「と、向こうは言っているが？」

西村教諭は再度こちらを向いて尋ねた

確かにこちらは一人、あちらは複数、証言の数でこちらが負けている

現に自分達が有利と知ってか、西村教諭の後ろでイヤな笑みを浮かべている

が、

こちらには切り札がある

「ちょっと待ってくださいよ」

『『「??」』』

松也は教室の窓側の隅へと向かった

そして、そこにあるカバンから

「よっと」

『『『!!!』』』

ビデオカメラを取り出した

「これを見てくれますか?」

そこには、先程のやりとりが映し出されていた

「……さて、なにか言い訳はあるか?」

『ほ、補習はイヤだ!』

『助けてくれ！』

『お母ちゃーん！』

「……これは証拠と校則違反ということで預かるぞ」

「分かりました」

そうゆうとBクラス生徒を連れて行ってしまった

第十二話（後書き）

もっと、文章力を上げたい……

第十三話（前書き）

連日投稿♪

第十三話

「おぅ明久に秀吉、戦況はどうだ？」

西村教諭が去ってしばらくすると明久達が戻ってきた

「なんとか渡り廊下を抑えたよ」

「ところでお主一人でどうしたのじゃ？」

「雄二達は停戦協定を結びにいって、俺は留守番ってわけだ」

「停戦協定？」

「実はな……（説明中）……というわけだ」

「「なるほど（のう）」」

「……お前等何してんだ？」

どうやら雄二達も戻ってきたようだ

「僕達はＢクラスの代表が根本だって知って、心配になって戻ってきたんだ」

「そうか、まぁ松也の報告で知ってはいたがな」

「え？そうなの？」

「じゃから松也は来なかったのかの？」

「あぁ、予想通り嫌がらせで設備を壊そうとしてたが、返り討ちにしておいた」

「そうか、ご苦労だったな」

「お構いなく」

その後、しばらく話し合いは続いた

「「大変だ！！」」

「どうしたんだ一体？」

「何かあったのか？」

「島田が人質に捕られた！」↑須川

「こっちは姫路さんが！」↑近藤

『『『『なに！！？？』』』』

二人の知らせを聞き、教室が騒然となった

話は数分前にさかのぼる

ＳＩＤＥ　瑞希

なんで松也は来なかったんでしょうか…

き、きっと大切な作戦があるからです！

そうです。そうに決まってます…

『……』

？何か話し声が聞こえますが…何を話してるんでしょうか？

『……おい…れ本当か？』

『あぁ間違いない、さっきFクラス教室に突入した奴等から聞いたが、鈴風ってやつが大怪我したらしい』

え！？

松也くんが怪我を！

『それで、そいつどうなったんだ？』

『さぁな、確か保健室に行ったはずだがな、それより戦争中だろ？』

『そうだな』

保健室ですね！！

すぐに行かないと！！！

「あ、あのすみません。ちょっと行ってきます！！」

『え！？姫路さん！』

姫路は急いで保健室へと向かった

後ろから来る影に気づかずに……

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「なんで島田さんと瑞希ちゃんが人質に！？」

「そうだ！どういうことだ！！」

「落ち着けお前等！」

「そうじゃぞ！ひとまず訳を聞かなくては話にもならんぞ！」

雄二達にいさめられて、ようやく明久と松也は落ち着いた

「そうだね…」

「すまん、取り乱して……で、どういう状況なんだ？須川に近藤」

『どうもこうも、いきなり島田が走り出してどこか行ってしまってさ…』

『そのすぐ後に、姫路さんも後を追う様に…』

「……その後に捕まったのか……」

「とにかく、明久と秀吉は須川ともう一人を連れて島田の方へ、悪いが松也は近藤と二人だけで姫路の方を頼む

いいか、できるだけ早く助け出せ！！」

『『『了解！！』』』

こうして松也達は戦場へと向かった

第十三話（後書き）

まさかの姫路が人質に！

果たしてどうなるのか！

第十四話（前書き）

更新が遅れました！

果たして姫路はどうなるのか！

第十四話

『そこで止まれ！』

『それ以上来たら、止めを刺して補修室送りにするぜ！』

ここは二階の渡り廊下、松也と近藤は姫路を捕らえている二人と対峙していた

よく見ると姫路の点数は一桁しかなかった

「松也くん……」

姫路は両手を捕まれており、目に涙を溜めて松也達を見つめた

（近藤、頼む）

（分かった）

俺たちは現在開発中のアイコンタクト（鉄人対策のため）をする

「おいおい、人質取ったくらいでいい気になるなよ？」

『はん！その余裕がいつまで続くかな？』

「お前等が倒れるまで続くが？」

『F（バカ）クラスのクセに調子のってんじゃねーよ！！』

カチャッ……

ギロッ！！

「調子にのってんのはテメー等の方だ！！」

『『！？』』

ガタガタッ

ブルブルッ

松也の目を見て、Bクラスの生徒は震え始めた

無理もない…

今の松也は目の白い部分が充血し……

金色の瞳と合わさって……

それはまるで……

……悪魔のような目をしているのだから

「近藤、今だ！！」

「おう！、試獣召喚（サモン）！」

『な！？』

『いつの間に！』

松也に気をとられているうちに、背後に回っていた近藤が姫路と姫路の召喚獣を助け出していた

「近藤！そのまま瑞希を頼む！」

「まかせろ！」

近藤は姫路を庇うように立った

「……さぁて、覚悟はできてるよな……」

松也はさっきよりも鋭い眼差しで戦闘準備に入った

『ひぃ、た、助けてくれ』

『お、お、お願いだ』

が、Bクラスの二人は松也に睨まれたことにより既に戦意を失っていた

「……許す気はねぇよ！！」

『『ぎゃあぁ～～～！！』』

松也は二人を倒すと何処かから現れた西村教諭に任せて、姫路達と一緒に教室へと向かった

「大丈夫か瑞希？」

松也と姫路は教室に向かっていた

ちなみに近藤には救出成功の知らせを頼み、先に行かせた

「……」

姫路は救出されてから一言も喋らない

「おい、どうしたんだ？」

「松也くん……ごめんなさい」

「？」

そういうと姫路はその場で頭を下げた

「松也くんの…力にな…

なることがで…できなくて…それに……

それに、足を引っ張るようなことを…して……」

「瑞希……」

姫路はその場で泣き始めた

「ごめんなさい……ご、ごめんなさい……ごめ」

「瑞希」

ギュッ

「ひゃあ／／／」

松也が姫路を抱きしめると驚いたような声をあげた

「瑞希、お前が気に病む事じゃないよ」

「で、でも…」

「それに言ったろ？『ピンチになったら行く』って、だから気にするな」

「……はい♪」

姫路は目に涙を溜めたまま笑みを浮かべた

「それじゃあ、さっさと教室に戻るか。みんなが待ってるからな」

「はい♪」

松也と姫路は足早に教室へと向かった

仲良く手をつないで…

教室に戻り、その光景を見たＦＦＦ団は松也に襲いかかったが、松也により地に沈んだ

第十四話（後書き）

さて、この後どうするか……

第十五話（前書き）

いよいよＢクラス戦が終わります

第十五話

「失礼するぞ」

あの後、教室で休憩していたが、ムッツリーニからCクラスの動きが怪しいという知らせを受け、雄二は主要メンバーを連れてCクラスに来ていた

「Cクラス代表はいるか？」

『Cクラス代表は私だけど』

そういうとCクラス代表の小山友香は前に出てきた

「？……あの松也くん？」

「どうしたんだ、瑞希？」

雄二が交渉している間、着いてきた松也達は雑談していると姫路が話しかけてきた

「あそこのカーテンの所に誰かいるように見えるんですが…」

「…なに？」

姫路の指さす方を見ると確かに誰か隠れているようだ

（誰か隠れてるみたいだが……！確かここの代表は！）

『それで何しに来たのかしら？』

「そうだったな、実は…

（まずい！）

Cクラスと不可侵じょ『雄二！！』……どうしたんだ松也？」

これから不可侵条約を結ぼうとした雄二だったが、松也に呼ばれ不機嫌そうに振り向いた

「雄二、これは罠だ！」

「罠だと、どういうことなんだ？」

「なぁ、そうだろ……根本」

「なに！？」

松也はカーテンの方を見るとみんなの目はそこに集まった

すると、そこから根本とBクラス生徒が十名程出てきた

「前に噂でお前に彼女がいるって聞いてな、確かここの代表がそうだったろ？」

『なんだと！』

『彼女持ちだと！』

『異端者だ！』

それを聞き、Fクラス生徒が根本に襲いかかろうとした

「待て、今は停戦中だ！後日、思う存分ヤっていいぞ！」

『『分かった』』

一先ず落ち着かせて根本達の方を向く

根本達は教室から出ようとしていた

「待て根本」

「チッ、なんだよ」

根本は舌打ちして、こちらを向いた

「なに、どうせならここで決着をつけねぇか？」

『『なに！？』』

両クラスから驚きの声があがる

「おい！いきなり何を言い出すんだ！」

「怒るなよ雄二、ちゃんと考えているから」

「ハッハッハッ！F（バカ）クラスが勝てると思ってるのか？」

「は？勝てるが？」

「なめやがって！」

「そうかい、それじゃあ再戦していいんだな？」

「いいだろう…叩きのめしてやる！」

「長谷川先生、停戦協定を無しにして再戦してもいいですか？」

『許可します』

こうして、Bクラス戦が再び始まった

『坂本を狙え！雑魚は構うな！』

開戦すると同時に根本は下がりながら命令を出した

「松也！作戦なんてあるの？」

「あぁ、とにかく明久以外は下がっててくれ！

いくぞ明久！」

「うん！」

「まず、俺が足止めする！

Ｆクラス　鈴風松也がＢクラス全員に数学で勝負を申し込む

試獣召喚（サモン）！」

『甘く見やがって！』

『いくぞ！試獣召喚（サモン）』

『『『試獣召喚（サモン）！』』』

《Ｆクラス　鈴風松也　数学　４１１点

ＶＳ

Ｄクラス　モブ×１０　数学　平均２１８点》

『な、なんだ！あの点数！』

『本当にFクラスか？』

（あれ？前にも聞いたような…）

『怯むな！相手は一人だけだ！』

『そうだ、一斉にかかれ！』

Bクラス全員が襲いかかってきた

「さて……腕輪発動！」

松也がそういうと松也の召喚獣がサングラスを外してBクラス生徒を見た

すると

『おい、動かせねえぞ！』

『どうなってるんだ！』

Bクラス全員の召喚獣が動かなくなった

「これが、俺の腕輪の能力『石化』だ

見た相手すべてを石にしてしまう

だから、味方も石にしちまうから面倒なんだよな」

松也がそう言い、松也の召喚獣はサングラスをかけ直した

「明久、こいつ等はあと数分は動けない

その内に根本を討ち取れ！」

「分かった！

Fクラス　吉井明久が根本君に数学で勝負を申し込む！

試獣(サモン)召喚！」

「ちくしょう！試獣(サモン)召喚！」

その後、明久が根本を討ち取り、戦争は終結した

第十五話（後書き）

腕輪がとうとうでました！

このあとの応用はどうしよう……

第十六話（前書き）

Bクラス戦が終わりました

根本がひどい目にあう予定です

第十六話

「……俺がDクラスに出した条件はなんだったんだ」

「まぁ、その、なんだ、すまん」

雄二はDクラスに出した条件が意味を為さなくなり落ち込み、松也は気まずそうに謝った

「はぁ、さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くかな、負け組代表？」

「……」

雄二の視線の先には、先ほどまでの強気だった根元が床に座り込んでいた

余程、明久に負けたのが響いているのだろう

「本来なら設備を明け渡して、お前らに素敵な卓袱台をプレゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言に対して、Fクラスが騒ぎ始めた

「落ち着け、前にも言ったが、俺達の目標はＡクラスだ
ここは通過点でしかないをだ」
「ああ。だから、Ｂクラスが条件を呑めば解放してやろうと思っている」
「……条件はなんだ？」
「条件？　それはお前だよ、負け組代表さん」
「俺、だと？」
「あぁ、お前には散々好き勝手やってくれたし、正直去年から目ざわりだったんだ」
「そこで取引だ。Ａクラスに行って試召戦争の準備が出来てると宣言して来い
そうすれば今回は設備については見逃してやっても良い
ただし、宣戦布告はするな。
すると戦争が避けられないから、あくまで戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」
「……それだけでいいのか？」

「あぁ、それだけで『待て雄二』今度はなんだ？」

「いい物があるから少しだけ待っててくれ」

そう言うと松也は教室から出て行った

数分後、松也は何かが入った鞄を持ってやってきた

「なんだそれは？」

「まぁ見てろよ、さて、Bクラスの代表がコレを着て先程言った通りの行動をしてくれたら、見逃してもいいぞ」

そう言って松也は鞄からチャイナ服を取り出した

「おいおい、それどうしたんだ？」

「先輩から貰ってきたんだ、失敗作だから、使い終わったら捨てていいってよ」

「確かにこいつが着たのなんてだれも着たがらないだろうな」

「バ、バカな事を言うな！　この俺が、そんなふざけた事を！」

『Bクラス生徒全員で、必ず実行させよう！』

『任せろ！　必ずやらせる！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はない！』

Bクラス面々はやる気満々だ

人望の無さがハッキリと分かるな…

「んじゃ、決定だな」

「くっ！　よ、よるな変態

ドゴッ！

ぐふぅっ！！」

『とりあえず、黙らせました』

「お、おう。ありがとう」

一瞬で代表を見限り腹部に拳を打ち込むBクラス男子生徒

あまりの変わり身の早さに、雄二もあっけにとられ、少し引いていた

「じゃあ、着付けに移るとするか。明久、手伝ってくれ」

「了解」

松也と明久はぐったりと倒れている根本に近づき、制服を脱がし始めた

「う、うぅ・・・」

うめき声を上げる根本

「おらっ！」

バキッ！

「がふっ！」

念のため起きないように追加攻撃をくわえておく

見慣れた男子の制服を脱がし、チャイナ服をあてがう

「うーん・・・これどうするんだ？」

「さぁな、俺も知らんしな…」

『私がやってあげようか？』

Cクラスの女子の一人がそう提案してきた

「いいのか？悪いな。じゃあ、せっかくだし可愛くしてあげてくれよ」

『それは無理。土台が腐ってるから』

「じゃ、よろしく」

松也達は女子に任せてその場を後にした

「ねぇ松也、この制服どうする？」

「俺に任せてくれ、いい考えがある」

明久から制服を受け取った松也は怖い笑みを浮かべていた

「こ、この服やけに短いぞ」

ある用事をすませて、教室に向かっていると根本の声が聞こえたの
でそちらを向いたが失敗だった
目をふさぎたくなるほど気持ちの悪い姿になっており、吐き気がした

『いいからキリキリ歩け！』

『さ、坂本と鈴風！よくも俺にこんなことを……』

『無駄口をたたくな！これから撮影会もあるからな、時間がないん
だぞ！』

『き、聞いてないぞ！』

「よう根本、随分気持ち悪い姿になったな」

松也は吐き気を抑えながら根本達に話しかけた

「鈴風！テメェよくも…」

『どうしたんだ鈴風？』

「いやな、撮影会が終わったら根本をここに連れてってくれ」

松也はそう言い一枚のメモを渡した

『分かった。それだけか？』

「後もう一つある、ちょっと耳貸せ」

『？』

Bクラスの一人を呼び、小声で話し始めた

「いいか、根本を案内したら、すぐに逃げろ

……死にたくなかったらな」

『おいおい、何があるんだよ』

Bクラス生徒は笑い出したが

「……がいる」

ビクッ！

ブルブルッ

ある人物の名をいうと震え始めた

「いいな」

『……分かった。他のヤツにも言っとく』

「頼んだぞ」

言い終わると松也は教室に向かった

「あ、松也、何処に行ってたの？」

「野暮用さ、それより瑞希に明久、帰るか」

「そうだね」

「はい」

こうして松也達は帰って行った

〜余談〜

「本当にここに制服があるのか？」

根本は撮影会が終わり、制服を取りに旧校舎のとある教室に来ていた

『さっさと入れ』

「分かったよ…」

根本は教室に入っていった

『よし、逃げるぞ！』

『あぁ、そうだな！』

根本を連れてきたＢクラス生徒達は急いでその場を後にした

（ちくしょう！俺に恥をかかせやがって！

おかげで友香とは別れるはめになっちまった

どう復讐してやろうか…）

ガチャ

「？」

そんなことを考えていると鍵の閉まる音が聴こえ振り向くと

そこには

「あなたがそうなのね？」

船越先生がそこにいた

「な、なぜここに！」

「鈴風君から告白したい生徒がいるからここで待ってるように言われたのよ」

「あいつなんて事を！」

「さぁ、愛し合いましょう」

「い、いやだ！来るな…

ぎゃあぁ～～～～～！」

この日を境に根本は女装癖と熟女好きという噂がたったのは言うまでもない

第十六話（後書き）

船越先生に喰われた根本

こうして、学園（特に男子）の平和は守られた

次回からいよいよＡクラス戦！

第十七話（前書き）

いよいよＡクラス戦へ

第十七話

「一騎打ち？」

「ああ、Ｆクラスは試召戦争として、Ａクラス代表に一騎打ちを申し込む」

補給試験も終えた翌日、松也達はＡクラスに宣戦布告に来ていた

その前にＡクラス代表の霧島翔子と雄二が幼なじみであることが判明し、一騒動あったのは別の話、

「うーん、なにが狙いなの？」

「もちろんＦクラスの勝利が狙いだね」

秀吉の双子の姉である、木下優子が交渉にでていた

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね

だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

「賢明だな

ところでＢクラスとやりあう気はあるのか？」

「Bクラスって
……昨日のあの……」
昨日の根本の格好を思い出し顔を青ざめる優子
後ろを見るとAクラスの何人かは吐きそうになっていた
「そうだ。幸い宣戦布告してないみたいだが、どうなることやら」
「ちなみにBクラスとは『和平交渉にて終結』って形になってるからな」
「あと、BクラスだけじゃなくDクラスもだからね」
「……それって脅迫じゃない？」
「いや、ただの忠告だ」
「うーん……わかったわ。なにを企んでいるかは知らないけど、代表が負けるわけないから、
その提案受けるわ」
「でも、こちらからも提案
代表同士の一騎打ちだけじゃなくて、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、ていうのなら受けてもいいわ」

「姫路がでる可能性の警戒か？」
「そうよ」
「その条件を呑んでもいい」
「ホント？」
「その代わり、勝負の内容はこちらで決めさせてもらう」
「え？う～ん……」

「……受けてもいい」
「うおっ！？」
いきなり目の前に日本人形のような少女、霧島翔子が現れた
「……雄二の提案を受けてもいい」
「あれ？代表、いいの？」
「……そのかわり、条件がある」

「なんだ？」

「……負けた方はなんでも一つ言うことを聞く」

「わかった。交渉成立だ」

「え！？いいの！？」

「おい雄二、本当に大丈夫なのか？」

さすがに心配になり、松也が雄二に話しかけた

「なに、心配するな」

が雄二は余裕だとばかりに言った

「……勝負はいつ？」

「今日の午後からでいいか？」

「……わかった」

「じゃ、教室に戻るぞ」

交渉成立したので、みんなは教室へと戻っていった

～余談～

Fクラスメンバーが帰った後のAクラス教室での会話

「ね、ねぇ、翔子…」

「……なに？」

翔子に話しかけた女子生徒は驚きの表情を浮かべていた

「雄二くんの左側にいた男の子の名前って分かる？」

「？……吉井のこと？」

ちなみにさっきの立ち位置は雄二を先頭に左が明久、右が松也という形である

「吉井くんっていうんだ……」

女子生徒は何かを想うように遠い目をした

その頬は少しだけ紅く染まっている

翔子は訳が分からずに首を傾げていた

第十七話（後書き）

果たしてこの女子は！？

第十八話（前書き）

洲鳴さん、感想ありがとうございました！

第十八話

「それでは二回戦の生徒は前にでて下さい」

午後からAクラス戦が開始され
今から二回戦が始まろうとしていた
ちなみに一回戦は優子対秀吉で行われ、秀吉も必死に応戦していたが
結果は優子の勝利として終わった

「僕が行くよ」

明久は立ち上がり、前へと歩いていった

Aクラスを見るとどうやら女子のようだ
肩までかかるぐらいのウェーブのかかった金髪に青い瞳、白い肌と
相まって、
まるで、フランス人形を思わせる姿だった

「あれ？キミって、確かあの時の？」

「はい、あの時はありがとうございました♪」

「ん？明久、知り合いか？」

「うん、ほら、この前話した…」

「ア～キ～」

ビクッ

声のした方を見ると美波とその後ろにＦＦＦ団が凶器を構えて立っていた

ちなみに人質の一件の後に明久達は名前で呼び合うようになったみたいだ

「え！なに、美波怖いよ！」

「あの子は誰よ！」

「誰って、この前、病院まで連れてった子だけど？」

「あぁ、あの振り分け試験の日に助けた子か？」

「うん、元気そうで良かったね。え～と……」

「まだ名乗っていませんでしたね

私は薄野（すすきの）　月美（つきみ）です」

「僕は吉井　明久っていうんだ。よろしくね、薄野さん」

「はい、よろしくお願いします」

仲良く二人で自己紹介をしていたが

『なによアキは！』

『ちくしょう、吉井のくせに！』

『あの異端者が！！』

『……裏切り者に死を！』

その後ろでは美波とＦＦＦ団＋ムッツリーニから黒いオーラがでていた

「月美か？久し振りだな」

「うん、雄二くん久し振り」

そんななか雄二は月美に話しかけていた

「雄二、薄野さんのこと知ってるの？」

「あぁ、翔子の従姉妹だ」

『総員、構え！』

雄二の言葉に先程の教室のようにみんなが一斉に構えた

だが、今回は上履きではなく

カッターであった

「待て！そんなもん投げようとするな！」

『黙れ！』

『霧島さんに続き、薄野さんとも知り合いだと！』

『……覚悟しろ！』

『うらやましいんだよ！チキショウ！』

あちこちから怒号が飛び交う

カチャ

ギロッ！

「いいから黙れ！！」

『『『『すみませんでした～～～～！！！！！』』』』

見かねた松也がにらみつけ、ＦＦＦ団を黙らせた

「そろそろ、よろしいでしょうか？」

「あ、すみません。待たせてしまって」

「科目は何にしますか？」

「英語でお願いします」

科目指定はAクラスが行った

ちなみに先程の一回戦は秀吉が指定した

「では、はじめて下さい」

「「試獣召喚(サモン)！！」」

こうして、二回戦が始まった

第十八話（後書き）

ついに少女が登場、果たして今後の展開は！

第十九話（前書き）

今回は連続投稿です

文章がかなり短いです

第十九話

「「試獣召喚（サモン）！！」」

月美の召喚獣は青いドレス（フランス人形の服を想像してもらいたい）を着て、

武器は…

『アレって、水晶玉か？』

『どうやって戦うんだ？』

占いなどでよく使われる水晶玉だった

「いくよ、薄野さん！」

「はい！」

そういうと明久は月美に向かっていった

「えっと……確かこうでしたね！」

キュイーーーン！！

「え？」

バキューーーン！！

「ぎゃあぁ～～！！体が燃えるように痛い～～！！」

「明久くん！」

姫路が明久に駆け寄ると

《Ｆクラス　吉井明久　英語　９５点
ＶＳ
Ａクラス　薄野月美　４３８点》

今更ながら点数が表示された

なにが起きたかというと

まだ、操作に慣れていない月美が腕輪を起動してビームを発射させたのだ

「え？よ、吉井くん大丈夫ですか？」

明久が観察処分者だと知らない月美は、なぜ明久が苦しがっているのか分からないでいた

「薄野さん心配しなくてもいいよ」

「で、でも…」

「僕は大丈夫だから」

明久は不安そうな月美に笑顔をを向けた

「は、はい／／／／」

その笑顔を見て月美は頬を紅く染めていた

「なぁ、雄二。あれは完璧に…」

「惚れてるな…」

その様子に大半の者が月美が明久に好意を向けているのが分かった

「ただいまの勝負はＡクラスの勝利です」

高橋先生の宣言で二回戦は終わった

第十九話（後書き）

いよいよネタがなくなってきた……

第二十話（前書き）

いよいよムッツリーニが戦います

第二十話

『それでは三回戦をはじめて下さい』

「……（スクッ）」

高橋先生の言葉にムッツリーニは無言で立ち上がり、前に向かっていった

「じゃ、僕が行こうかな」

どうやらAクラスから女子がでるみたいだ

「1年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

「教科は何にしますか？」

「……保健体育」

ムッツリーニは最強の矛（教科）を告げた

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？

でも、僕だってかなり得意なんだよ？
キミとは違って……

『実技』でね♪」

「……！（ブシュー！）」

「ムッツリーーーニ！！」

明久は急いでムッツリーニの元に向かった

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかったら僕が教えてあげようか？

もちろん『実技』でね♪」

「え！あ、えっと…」

工藤の誘いに明久の気持ちは揺れていると

「だ、だめ！！」

月美が大きな声で遮った

「え？」

「あ、え、その……／／／／／／」

自分が言った意味を理解してか、月美は顔を真っ赤にさせていた

その光景に周りは和んでいたが…

「そうよ！アキには永遠にそんな機会来ないんだから必要ないわよ！」

「……ｏｒｚ」

島田の言葉で場はしらけてしまった

「島田、明久が死ぬほど哀しそうにしてるんだが……」

「だ、だって……」

「じゃあ、そっちの鈴風君が一緒に勉強する？

もちろん、『実技』でね♪」

「え？あ、いや……」

いきなりの誘いに流石の松也も焦ってしまったが

「ダメです！！」

今度は姫路が遮った

「……！……！（バタバタッ！）」

松也は今、天国と地獄にいた

なぜなら

姫路が松也の頭を抱いている形になっているからだ

その柔らかな感触が心地よかったのだが

挟まれているので息ができずに松也は苦しんでいた

「おい姫路、松也が死にかけてるぞ」

「え？ひゃあ！し、松也くん！大丈夫ですか！」

「だ、大丈夫……心配するな……」

鼻を押さえながら松也は姫路に話しかけた

ちなみに

『んの野郎！』

『なんて羨ま……妬ましいぞ、こら！』

『……（ブシュー！）』

『ム、ムッツリーニ！』

Fクラスから嫉妬の声をあげ、ムッツリーニは姫路の胸を見、また血の海に沈んでいった

『そろそろ召喚を開始してください』

「はーい、試獣（サモン）召喚っと」

「……試獣（サモン）召喚」

召喚獣が現れ、それぞれの武器は、ムッツリーニは小太刀の二刀流

工藤の方は…

「なんだあの巨大な斧は！？」

巨大な斧だった。しかも腕輪も装備していた

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ

バイバイ。ムッツリーニくん」

工藤は巨大な斧を振り下ろした

「ムッツリーニ！」

「……加速」

まさに当たると思った瞬間

ムッツリーニの召喚獣の姿がブレた。

「……え？」

工藤の戸惑う顔、Ａクラス生徒も驚いていた

「……加速終了」

ムッツリーニがつぶやくと一呼吸置いて、工藤の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた

《Ｆクラス　土屋康太　保健体育　５７２点
ＶＳ
Ａクラス　工藤愛子　保健体育　４６３点》

遅れて点数が表示された

「流石、ムッツリーニだな」

「あぁ、だが点数の表示が遅くないか？」

「そこはいうなって……」

ムッツリーニの点数に松也や雄二は感心していた

「そ、そんな……！この、ボクが……！」

工藤は床に膝をついていた

相当ショックを受けているようだ

『それでは四回戦の選手は前にでて下さい』

高橋先生は少し動揺した声音で次の選手を呼んだ

第二十話（後書き）

ネタが尽きつつある

どうしよう……

余話～キャラ紹介？～（前書き）

遅れましたが

明久のヒロイン登場です

余話～キャラ紹介？～

名前：薄野　月美

読み：すすきの　つきみ

容姿：身長は翔子と同じ。肩までかかるぐらいのウェーブのかかった金髪に青い瞳、白い肌とまるで、フランス人形を思わせる姿をしている

顔にそばかすがあり、これがもとでいじめられた過去があるため、コンプレックスになっている

クラス：Ａ

趣味：読書

特技：裁縫

好きなもの（こと）：翔子・両親・友達（特に明久）・ぬいぐるみ作り

嫌いなもの（こと）：暴力を振るう人（特にＦＦＦ団＋美波）

成績：Ａクラスに入れるほどの成績はあり、英語は得意科目であるが、数学は苦手科目である（それでも１５０点台まである）

備考：母がイギリス人のハーフである。翔子とは従姉妹同士で雄二とも面識がある

体は丈夫ではなく、貧血で倒れてしまうこともしばしばある

明久に淡い恋心を抱いている

余話～キャラ紹介？～（後書き）

この後も続々とオリキャラが登場します

第二十一話（前書き）

連続投稿！

今回のは短いです…

第二十一話

「私が行きます」

「それなら僕が相手しよう」

こちらからは姫路が対して、Ａクラスからは学年次席、久保利光がでてきた

『科目はどうしますか？』

「総合科目でお願いします」

『それでははじめて下さい』

「「試獣召喚（サモン）！」」

召喚獣が現れ、少ししてから点数が表示された

《Ｆクラス　姫路　総合科目　４４０９点
ＶＳ
Ａクラス　久保利光　総合科目　３９８２点》

『な、なんだあの点数！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、代表に匹敵するぞ！？』

Aクラスから驚きの声があがる

「ぐっ！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだい？」

久保は悔しそうに姫路に尋ねた

「……私、このクラスが好きなんです。人の為に一生懸命な、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。そ、それに松也くんもいますし／／／／／」

『試合をはじめて下さい』

姫路のノロケにまた試合が長引くと思ったのか高橋先生が再度、試合開始を告げた

「あ、すみません／／／い、いきます！」

「僕も！」

試合がはじまった

数分後、試合は姫路の勝利で終わり

残すは、あと一試合となった

第二十一話（後書き）

この試召戦争が終わったら、どのルートでいくか……

第二十二話

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室から戻ってきた雄二達

高橋女史が終戦を告げた

五回戦に雄二の秘策を使ったが、結果は雄二がミスをしてFクラスの負けとなった

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「いい覚悟だ！殺してやる！歯を食いしばれ！」

「明久！手伝ってやる！」

「アキ、落ち着きなさい！」

「松也くんもです！」

松也が姫路に、明久が美波に後ろから抱きつかれて止められた

「だいたい、５３点ってなに！０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと…」

「いかにも俺の全力だ！」

「威張るんじゃない！」

「この阿呆がぁーっ！」

「アキ！アンタだったら３０点も取れないでしょうが！」

「日本史と世界史なら、こんなヤツよりまともな点数取れるよ！」

「そうだぞ！日本史と世界史なら明久はこんなゴリラに負けんぞ！」

「それだと他は悪いんですか？」

「「それは否定しない！！」」

「それなら、坂本君を責めちゃだめですっ！」

「くっ！何故止めるんだ美波！この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑じゃない！」
「いや、ここは簀巻きにして全員で袋叩きにした後に屋上からヒモなしバンジーを」
「それも処刑とかわりません！」
「……でも危なかった。雄二が油断していなければ負けてた」
「言い訳はしねぇ」
（図星かよ……）
松也は苛立ちを通り越して、呆れかえってしまった
「……ところで、約束」
「……！（カチャカチャカチャ）」
「何してるんだ、ムッツリーニ？」
なぜかムッツリーニがカメラを用意しはじめた
「松也は知らないの、あの噂？」

「噂？」

「うん、霧島さんが同性愛者って噂」

「あ～、あれか？気にすることもないだろ」

「え？どうして？」

「噂は所詮、噂ってことだ」

「？」

明久と松也が話していると

「わかっている。なんでも言え」

「……それじゃ……

……雄二、私と付き合って」

翔子の発言にその場にいる全員（一部を除く）の動きが止まった

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない」

そう、同性愛者という噂も単に好きな人に近づく女性を警戒してたにすぎないのだ

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐぁっ！放せ！」

「ちょっと待ってくれ霧島」

教室から出て行こうとした翔子を松也が止めた

「……なに？」

「それは単なる個人的な約束事だろ？

クラス全体のじゃないとAクラスの奴ら納得しないんじゃないか？」

「そ、そうだぞ翔子！！」

松也の発言にここぞと雄二が乗ってくる

「……それじゃあこれは個人戦をした人達、全員ができることにする」

「個人戦は個人戦として、クラスのは別、ってことか？

いいだろう、邪魔したな霧島、楽しんできてくれ」

「……ありがとう、鈴風はいい人」

「おい、こら松也！助けやがれ～～～！」

ぐいっ

つかつかつか

ピシャ！

霧島は再び、雄二の首根っこを掴んで教室を出て行った

「さて、Ｆクラスの諸君。お遊びの時間は終わりだ」

突然、Ｆクラスに野太い声が掛かる

声のしたほうを見ると
そこには西村教諭が立っていた

「あれ、西村先生？僕らになんか用ですか？」

「ああ。今から我がＦクラスに補習についての説明をしようと思ってな」

「え？我がＦクラス？」

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が替わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『『『『なに！！』』』』

クラスの男子全員が悲鳴をあげる。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Ｆクラスがここまで来るとは正直思わなかった。

でもな、いくら『学力が全てではない』といっても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからと言って、ないがしろにしていいものじゃない」

「吉井と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の

《観察処分者》と《A級戦犯》だからな」

「そうは行きませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活をすごして見せます！」

「お前らには悔い改めるという発想はないのか……

とりあえず明日からは授業とは別に補修の時間を二時間設けてやろう」

『『『『はぁ～～～～』』』』

「あからさまにため息をつくな！」

「まったく、明日から大変だ……」

松也は人知れず、もう一度ため息ついた

第二十二話（後書き）

まだまだ続くよ

第二十三話

「まぁ、なんとかなるか？ところで木下姉」

「？」

「例のクラス間での事だが、どうする？」

「そうね……3ヶ月間の試召戦争の禁止を4ヶ月にしてくれる？」

「そうだな。じゃあ今度のは個人戦のだ」

「私はないわよ、これって勝者がない場合はどうするの？」

「そうだな…そのまま敗者ができるって事にするか？」

「えぇ、それでいいわ」

「それなら、おーい！さっき戦っていたのはこっちに来てくれ！」

「どうしたのじゃ松也？」

「さっきの戦いで勝った方がお願い事ができることになった

ちなみに勝った方がない場合は負けた方ができる

それで木下姉はないから秀吉、どうする？」

「ワシも特にないぞ」
「そうか、他はどうだ？」
「私はないです」
「僕もないよ」
松也の問いかけに姫路と久保は返した
「よ、吉井くん」
「ん？なに？」
そんななか月美は明久に話しかけた
「お願いがあるんですが……」
「いいよ、何でも言って」
「じ、じゃあ、私のこと名前で呼んでくれませんか？」
「へ？」
月美のお願いに明久は間抜けな声を出した

「ダメですか？」

「だ、大丈夫だよ！僕のことも明久って呼んでもいいよ」

「え／／／／／、そ、それじゃあ、あ、明久くん？／／／／／」

「／／／／／、う、うん、よろしくね月美／／／／／」

「／／／／／（ボンッ！）」

その光景はなんとも初々しかった

「さて、ムッツリーニは何かあるか？」

松也はその光景を見つつ、ムッツリーニに話しかけた

「……俺はない」

ムッツリーニはカッターを構えながら、そう言った

「そうか、工藤はどうだ？」

「それじゃあムッツリーニくん、今から代表みたくデートに行こっか♪」

「……！？」

『『『『『もう我慢ならねぇ～～～～！！！！』』』』』

工藤の発言の後、Ｆクラスが爆発した

『諸君、ここはどこだ？』

『『『『最後の法廷を下す場だ！！』』』』

『異端者には？』『『『『死の鉄槌を！！』』』』

『男とは？』

『『『『『愛を捨て、哀に生きる者！！』』』』』

『よろしい、これよりＦクラス異端審問会を始める！』

そこには黒覆面の被った集団、ＦＦＦ団が現れた

『罪状はいい、とりやえず即刻死刑！！』

『『『『『『おぉーーーーっ！！！』』』』』』

ＦＦＦ団は嫉妬の炎を燃やし、松也達に襲いかかった

「たく……明久、ムッツリーニ、手伝ってくれ」

「分かったよ！」

「……任せろ！」

こうしてＦＦＦ団との戦いが始まろうとしたが

「止めんか貴様等！！」

西村教諭の一喝に全員止まった

「そうか、そんなに元気があり余っているのなら今から補習をしてやる！！」

『『『『いやだぁ～～～！！！！』』』』

そのまま西村教諭はＦＦＦ団を連れて行った

「アキ！今日は約束通りクレープでも食べにいくわよ？」

明久はＢクラス戦の時に、美波とそんな約束をしていた

「え？それって週末って話しじゃないの？」

「いいから今か…」

「……吉井」

「うあっ！な、なんだ霧島さんか、どうしたの？」

いつの間にか明久の後ろに翔子が立っていた

「……吉井にお願いがある」

「え？僕に？」

「（コクッ）……月美を家まで送ってくれる？」

「ちょ、翔子／／／」

突然のことに月美は慌てだした

「僕でならいいよ。月美、カバン取ってくるから校門のところで待っててね」

「あ、明久くん！？」

明久は教室に向かった

「……月美」

「？」

「……がんばってね」

「う、うん！」

翔子の応援に月美は笑顔を浮かべた
その後ろで美波はｏｒｚになっていた

「さて、オレ達も帰るか」
「はい♪」

いつの間にか他の者も帰ったようで
松也と姫路も帰って行った

第二十三話（後書き）

次回からはオリエンテーリング大会をやります

新しい腕輪を出そうと思うので楽しみにしていて下さい！

第二十四話～オリエンテーリング大会・前編～（前書き）

ＰＶが３０，０００までいきました！

これからも頑張ります！

第二十四話～オリエンテーリング大会・前編～

「『文月学園主催　お宝争奪オリエンテーリング大会』だ？」

朝、姫路と登校すると黒板に紙が張り出されていた

「なんか豪華な賞品が出るらしいぞ？」

雄二が賞品が書いてある紙を見せてきた

「学食の食券一年分に新作ゲームの引換券なんてのもあるんですね」

「？このシークレットアイテムってなんだ？」

最後のところにシークレットアイテムと書かれていた

「さぁな、取ってからのお楽しみってことじゃないか？」

「おはよう、ところで皆して何の話をしてるの？」

話をしていると明久が教室に入ってきた

「あぁ、それはな…」

『あはよう、お前たち席につけＨＲをはじめるぞ』

「鉄人にでも聞いとけ」

「？」

松也達は取りあえず席についた

「お前たちもすでに知ってるだろうが、今日はこれからオリエンテーリングがある

詳しくはこのプリントに書いてあるから読んでおくように」

「なになに、三人一組チームになるのか、誰と組むんだ？」

「ちなみにグループはこちらで決めておいたから今から発表する」

西村教諭がメンバー表を張り出した

鈴風・姫路・木下（弟）

土屋・島田・須川
‥‥‥‥‥‥‥‥
他　吉井・坂本

「「ちょっと待て〜〜！」」

張り出されたと同時に明久と雄二が叫んだ

「なんだ他って！まさかこんなバカと二人でやれってことか！」

「そうですよ！こんなゴリラとやれなんてイヤですよ！」

「黙れ！吉井に坂本、お前たちは開校以来初の《観察処分者》と《A級戦犯》なんだ

他のヤツと一緒にすると何をしでかすか分からんから、監視役を付けることになった

今からAクラスに行くように」

「なんでですか？」

「お前たちはAクラスの生徒と組むことになったからだ
開始は九時からだから早く行くようにな」
そして明久と雄二は教室を出て行った

Aクラス教室前

「「失礼しま～す」」
突然の登場にAクラスの全員が驚いた
「丁度いいところに、後ろのところで待機してて下さい」
「は～い」　「う～す」
明久達は後ろのロッカーが並ぶ場所へと向かった

『それではオリエンテーリング大会のメンバーを発表します
前の画面を見てください』

スクリーンにメンバー表が表れた

‥‥‥‥‥‥‥

霧島・工藤・坂本

薄野・木下（姉）・吉井

『以上のメンバーです。ちなみにFクラスの坂本くんと吉井くんは監視対象ということで霧島さん達には悪いのですが一緒に行動してもらいます』

その説明にAクラス一同は納得した表情を浮かべた

『開始は九時ですので今から問題用紙を配ります
問題を解くことにより座標を割り出すことができます
その場所には引換券入りのカプセルがありますので、がんばって問題を解いていって下さい
なお、終了は放課後のチャイムまでです
では、解散』

こうしてＡクラスのＨＲは終わった

「……雄二、一緒に出来て嬉しい」
「おい！抱きつくな！」

ＨＲが終わると翔子達が集まってきた

「明久くん、よろしくお願いします」
「よろしくね、月美」

明久と月美は楽しく話し始めた

「……ねぇ、愛子」

「なにかな、優子」

「……なんか私たち仲間外れみたいね」

「しょうがないんじゃない？」

そんな光景に仲間外れの様な感情を受けてる、優子と愛子であった

第二十四話～オリエンテーリング大会・前編～（後書き）

このメンバーでどうなるのか……

期待してて下さい！

第二十五話～オリエンテーリング大会・中編～

「さて、まずはこの問題を解いていくか」

大会が始まると松也達は旧校舎の屋上に来ていた

「すまぬの、ワシは力（ちから）になれそうにないのじゃ」

「気にするなよ。瑞希、取りあえず問題を解いていこう」

「はい、松也くんは此方をお願いします」

「分かった」

松也達は問題を解いていった

数分後

「よし、粗方、解き終わったし探しに行くか」

「そうですね」

「うむ」

松也達は屋上を後にした

松也達が旧校舎の屋上からいなくなると同時に新校舎の屋上の扉が開かれた

「あ、ちょうど誰もいないみたい」

「そうみたいですね」

「ほら、早く問題を解きましょう」

大会が始まり、明久達は相談の結果、屋上に行くことにしたのだ

「取りあえず、私と薄野さんで問題を解いていくから吉井くんはそこにいなさい」

「待って木下さん、選択問題なら僕でも出来るよ？」

「吉井くん、選択問題、得意だったの？」

「ふっふっふっ、僕にはこれがあるからね！」

そう言うと懐から一本の鉛筆を取り出した

「……明久くん、それは……」

「これが日本史用、ストライカーΣ！」

「に、日本史用？」

「……吉井くん、日本史用ってことは他にもあるのね」

額に青筋を浮かべながら優子は聞いた

「うん、世界史用のストライカーΩとか、数学用のストライカーΛとか……」

明久は懐から次々と鉛筆を出していく

「……吉井くん、それ全部貸しなさい……」

「え？いいけど…」

優子は全ての鉛筆を受け取ると…

全て屋上から投げ捨てた

「あぁ！僕のストライカーズが！」

「あんなのに頼らないの！薄野さん、私たちは問題を解いてましょう」

「そ、そうですね…」

さすがに声をかけることが出来ず、月美は問題を解いていくことにした

数分後、明久達も屋上を後にした

その頃、下ではいきなり数十本もの鉛筆が降ってきたことにより、ちょっとした混乱が起こっていた

「お？此処じゃないか？」

松也達はとある教室の前に立った

「確かこの辺りのはずじゃがの……」

「あ、ありましたよ」

秀吉が探していると姫路が見つけたようだ

「それで何が入ってたんだ？」

「え～と、『紅葉劇団舞台公演チケット』だそうです」

「演劇のチケットなら秀吉、これはおまえのだな」

「いいのかの？ワシは何もしておらんのに…」

「いいんですよ。私は木下くんの夢を応援してるんですから」

「俺もだぞ？だから持っててくれ」

「二人とも……ありがとうなのじゃ♪」

二人の応援の言葉に秀吉は満面の笑顔をした

「さて、ここを移動して他のでも探すか」

こうして、次のを探しに行ったが、何も見つからず
終了を告げる、放課後のチャイムが鳴った

「ところで、明久と雄二は誰と組んだんだ？」

放課後、Ｆクラスの教室には明久、松也、雄二、ムッツリーニの四人がいた
秀吉は賞品を受け取りに行っている

「僕が月美と木下さんで、雄二が霧島さんと工藤さんだよ」

「ウオッ！何するんだムッツリーニ！」

いきなり、ムッツリーニが雄二にカッターを投げつけた

「……裏切り者には死を！」

「なぜ、俺だけなんだ！明久もだろうが！」

「……それはそれ、後で仕留める」

「結局、僕もなの！」

明久達が言い合っている中、松也はある事に気付いた

「……工藤のことで嫉妬でもしてるのか？」

それを聞いたムッツリーニの動きが一瞬だけ止まる

「ほぅ、そうなのか？ムッツリーニ」

雄二は意地悪い笑みを浮かべていた

「……そんな事実はない」

ムッツリーニはブンブンと首を横に振り否定していたが

頬が少し紅く染まっていた

「失礼しま～す」

教室の扉が開かれ、Ａクラスの四人と姫路に美波が一緒に入ってきた

「な、なんで翔子が此処に！？」

「さっきの大会の景品を渡しにきたのよ」

翔子の登場に驚いた雄二へ、優子は説明した

「へぇ、雄二達はいくつ取ったの？」

「俺たちは三つだな」

「そんなに？ウチ達は一つも取れなかったわよ？」

「……うらやましい」

「明久はどうだった？」

「月美と木下さんのおかげで二つだったよ」

「二つもか？俺たちは一つだったがな」

それぞれの戦果を話あってるなか…

「ねぇ、ムッツリーニくん」

愛子はムッツリーニに話しかけていた

「……なんだ？」

「此処じゃなんだから、隅の方にいこう」

「……それで？どうした」

隅の方に着くとムッツリーニは愛子に尋ねた

「あのね、さっき優子と交換して、ある喫茶店の無料券が手に入ったんだけど、よかったら一緒に行かない？」

「……！？」

「な～んてね、冗談だよ」

愛子は冗談だと笑っていると

「……いいぞ」

「ははは、え？」

ムッツリーニの返事を聞いて、愛子の動きが止まった

「……今度の日曜日でいいか？」

「ぼ、僕は用事ないけど…

…いいの？／／／／」

「（コクッ）……待ち合わせは後でだ」

それだけ言うとムッツリーニは急いで教室から出て行った

愛子はその場で顔を真っ赤にし、立ち尽くしてしまった

愛子は気付いていただろうか？

ムッツリーニの頬が紅く染まっていたことに……

第二十五話～オリエンテーリング大会・中編～（後書き）

ムッツリーニ×愛子はいい！

けど…

主人公って松也のはず……

第二十六話

「ただいまなのじゃ」

しばらく話していると秀吉が戻ってきた

ちなみに翔子達は顔が真っ赤の愛子を連れてＡクラスに戻り、美波も買い物があるからと帰ったため

教室には明久、松也、瑞希、雄二の四人が残っていた

「なんだ秀吉、その箱は？」

秀吉の腕の中には黒い箱があった

「これが賞品なのじゃが…」

「これがか？」

「へぇ、松也のは結構、豪華なんだね」

「いや、ただの演劇のチケットだけなんだが」

「なに？どういうことだ」

「とりあえず、開けてみませんか？」

姫路の提案により、なかを見てみたが

「なんだ、チケットしか入ってないじゃないか」

箱の中にはチケットが一枚入っているだけだった

「？ちょっとかしてくれない？」

明久は何かに気付いたようで姫路から箱をもらい、いじっていると

カパッ

「二重構造になっていたのか…」

「それで、何が入っているんだ？」

「え～と、腕輪と眼鏡？」

箱の中には赤い腕輪と縁なしの眼鏡が入っていた

「お、説明書が入ってる」

「なんて書いてあるんだ」

雄二に促され、松也は読み始めた

「なになに、『この腕輪の名は緋金の腕輪という。能力は召喚獣を視認不可、透明にすることができる。付属の眼鏡は透明になった召喚獣を見るためのものである』」

「あ、ほんとだ。これ伊達眼鏡だよ？」

「続き読むぞ、『ただし、この腕輪を発動すると点数が半分になるので気を付けること、解除した場合は元の点数に戻る。最後にキーワードは《インビシブル》である』だとさ」

一通り話し終わると雄二達の方を向いた

「で、これは誰が持つ？」

松也は緋金の腕輪を持ちながら雄二達に聞いた

「お前でいいだろう？」

「そうだね、松也が持ってれば？」
「瑞希と秀吉はそれでいいか？」
「はい、私もそれがいいと思います」
「ワシも演劇のチケットを貰ったからの」
「分かった、これは俺が持ってるよ」
松也が緋金の腕輪を手に入れたぞ～～！
……ひとりでやると悲しいな
「？」
「どうしたの？」
「いや、なにか誰かの悲しそうな声が聞こえたんだが」
「？」
「気にしないで帰るか」
「そうだね、それじゃあね雄二に秀吉」
「あぁ」

「うむ」

明久は松也と姫路と帰って行った

ていうか、気付いて……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8304x/

バカとテストと色付き眼鏡(サングラス)

2011年12月12日23時51分発行